
ドラえものの道具を手に入れた男の逆襲

AKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえものの道具を手に入れた男の逆襲

【Nコード】

N7319K

【作者名】

AKA

【あらすじ】

ひょうんなことからドラえものの道具を手に入れた男が世間に対して復讐を始める。男はついに世界を巻き込んだ騒動を起こす・・・。

第一話

その男はドラ焼き屋で働いていた。

男は45歳。2年前に離婚した。容姿端麗とはいえない。普通のどこにも出もいるおじさんといった感じが。

必死に働いてもいいことが無い。毎日の終わりに飲むビールが疲れを癒す。それだけが男にとっても至福の時だった。

そんな毎日を送っていた、ある日。

いつも通りに出勤し、定時の5時まででもう少しといったときだろうか。

店にメガネの男の子が飛び込んできた。

「ドラえもん！」

と叫びながら。

そしてその後を体格のいい、いかにもガキ大将、といった男の子が飛び込んできた。手には木製バット。いじめっ子か？

「やい、のびた！」

この子はのびたというのか。

後から入ってきた体格のいい子が、手を振り上げ、めがね少年ことのびた君を殴ろうとしたそのとき。

「空気ピストル——！」

そんな声が聞こえた……ようなきがする。

その瞬間、その体格のいい子がふっとんだ。

そしてドラ焼きの入っているショーケースに直撃。ショーケースは粉々に……。

気づくと目の前に真っ青な……タヌキが仁王立ちしていた。

「大丈夫かい、のびた君？僕は、君を助けに来たのさ」

丸い顔に似合わず爽やかなことをさらっと言うタヌキ。何者だ？

いや、それよりも。このショーケースをどうにかしなければ。

「君たち。このショーケースは誰が弁しょ」「ありがとうドラえもん。おかげで助かったよ!」……」

「そんなことはないさ。君を守るのが僕の役目だからね。のびた君、さ、帰ろうか」

青いタヌキはメガネを連れて帰ろうとする。

店のもの壊しとしてそれはナイだろうが。俺は怒りに震えていた。これで弁償してもらわなければ借金、もしくはこの仕事をクビになる可能性もある。せつかくつかんだこの仕事を逃したくはない。何が何でも弁償させてやる!

俺はタヌキの腹に手を伸ばし腹をつかんだ。つもりだったが。何かが取れた。ペロンと。

それに気づかずタヌキはいつてしまった。

………

店を壊したということでは俺はクビになった。予想はしていたが現実に受け入れることと、予想することは大きく違う。

俺はあのタヌキが憎い。

こんな薄っぺらい布なんかもっていたって何の意味もない。

「あれ?布じゃない?」

これポケットだったのか。しかも材質がなんか変な感じがする。もしかして高価なものか?

だとしたら売ればいい値が付く!

「なわけないよな。タヌキのポケットだぞ。高いわけがないだろう」
厚みから考えて何も入ってないだろうが俺には別の考えが浮かんだ。

中に名前がかいてあれば。あいつらの親に責任取らせるんだ。

中から……針が出てきた。
なんだこれは。

「おちよくってんのか！」

腹が立っていた俺は近くの車に針を突き刺す。

プシューッと空気が抜けたようにぺしゃんこになった。

俺の前には車だったぺしゃんこの塊だけ。

「ふえ？」

45歳でこんな声を出すなんて……。俺はあわててあたりを見まわす。

幸い目撃者はいないようだ。

俺はひとまず針をポケットにしまつと……まだ何か入ってる。

錠剤が入ったビン。

クイックと書いてある。

飲んで大丈夫だろうか。

飲んだら今みたいに空気が抜けてしまつのではないのだろうか。

「飲もう」

その日俺は6時間、全速力で走りつづけた。

人生初の体験だった。

6時間フルマラソン、45のフリーターにしては珍しい体験だった。

第二話

気付いた時俺は、どこかの山の中に居た。
薬を飲んだときからはや6時間。

こうなったのもあのタヌキのせいだ。体中が悲鳴を上げているのを気のせいで片付けるは無理なようで、俺は倒れ込んだ。

「くそつ。なんか歩いて家に帰らなくてもいいものはないかね？」
つぶやきながらポケットに手を突っ込み取り出したものは……

テテテテッテター！

パイプだ。

パイプタバコだ。

「ふつ。パイプはいいねえ」

吸ったことないのだが、パイプも吸ったことのない貧乏人だと思われたくなくて（誰もいないのに）ちよつと格好をつけてみる。

それになぜだろう。さつきといい今といい。

ものを出した時に効果音がしたような気がするんだが………

仕方なく一服。

するとまん丸な煙ができる。煙はそのまま俺の体にかかる。

「きれいな丸だ。俺って結構ダンディだな」

そしてそのまま俺の体が浮き始める。

「意外と金持ちの生活が似合ったりしてな。ふははははははははは……は？」

まるで煙の浮き輪だ。

俺は風に流されまたどこかへ……。

「おいおい勘弁してくれよ」

俺が空へ飛び立って10分。

ようやくコツがつかめ、家へと向かった。

といつても月1万のぼろアパートだが。

しかし今の俺はそれさえも苦しい。しかも今は職がなくなったのだ。払えるわけがない。

そんな俺に大家は毎日催促に来る。

ったく。人のことも考えろってんだ。

そして俺がアパートの前に降り立って数秒、大家が出てきた。

「家賃払わなきゃ出てってもらって昨日いったら？」

ちよつとそれは……。

恐れていた出来事。

背中に悪寒が走る。

「あの明日……」

そんな俺の言葉にはまったく耳を貸さない大家さん。

「出て行つて」

見れば俺の部屋の前に俺の荷物が山積みにしてある。

山積みといつてもそんなにないのだが。

どうしよう。

もしかしたらこのポケットの中にはまだあるかも。

「家的なもの！なんか出てこい！」

そんなことを思いつつポケットに手を入れる。

なにかある。

これは……、壁紙か？

大きさはポスター程度だが、ひとまずそれをアパートの庭の壁に

貼る。

家の絵が描いてある。

「あれだけの事があつたんだ。何があつても不思議はないな」
ためにドアノブに手をやると……。

「開いちやったよ……」

45年生きてきた中でもこんな出来事は初めてだった。

壁紙の中にしいた布団の中で俺は思った。

俺をいとも簡単にくびにした店の主人。

離婚した妻。

不景気にしてしまった政治家たち……。

そしてのさばる犯罪者ども。

働かぬ若者ども。（お前も無職だろ）

そうだ。

今の俺の力があればそんなやつら一ひねりだ。

そうだ。

世の中に復讐してやる。

この俺の力を存分に見せ付け、世界を恐怖のどんどこに落としてやるのだ！

その夜、庭にあつた変な壁紙を大家さんは拾って孫にあげた。

中でおおいびきかいている男がいるとも知らず。

その夜孫は紙の中から聞こえる奇妙な音で眠れなかったという。

第三話

俺が目をさまし外へ出るとそこには見慣れない部屋があった。
見慣れない、ということは無い。

部屋のつくりは俺が住んでいた部屋と同じなのだから。

違うのは、置いてある家具、装飾品。

ぐるりと辺りを見回す。

そばには小さな男の子が。

目をこれでもかと思開いてこちらを見つめている。

こいつは確か大家の孫のはずだ。

どうやら大家は、この壁紙を拾って孫に渡したようだ。

大家にこのことを後悔させてやる。

子供がどうなるうとかまわない。

世の中に復讐する。

俺はもう迷わない！

昨日使い方を確かめた道具を取り出し……

「ドカン！」

思い切り叫ぶ。

すると腕にはめた砲状の筒から空気の塊が飛び出す。

空気の塊は男の子に直撃し、

男の子はコンクリートの壁を貫通して向こうに消えた。

ふっ。俺に逆らうからさ。

ま、あの子は何もしてないが。

壁の向こう側で叫び声が聞こえる。

壁紙をポケットにしまうと俺は歩き始める。

ポケットの中を探る。

あった。これだ。小さな瓶だ。

俺は取り出した瓶の液を指先につけた。

これなら銀行に入ったとしてもすぐに警察はよばれないだろう。

そう、俺はまず資金を調達することにしたのだ。

銀行の中にゆっくり入る。

そして窓際に近寄りささやく。

「金を出せ」

武器も持たずそんなことを言う俺を変だと思ったのだろう。

銀行員は何の行動もしない。

これは予想通りだ。

「バン」

小声だがはつきりとつぶやいた。

そしてガラスが砕け散った。

突然のことに戸惑う人々。

「今は威力を弱めてやったが、次は本気で行く。分かったら金を出せ。」

銀行員を威嚇しつつ脅す。

俺は武器らしいものを持っていないから、他の銀行員に警察を呼ばれることも無い。

銀行員が取り出した金をつかみポケットに入れる。

かなりの量の金が一瞬で消えて驚いている。

ふっ。驚くのは速い。

俺はありったけの空気を吸うと天井に向けて大声をあげた。

俺が出口をゆうゆうと歩いて出る間に、

銀行は轟音とともに崩れ去った。

これでいいのだ。あの有名な曲が頭を駆け回る。

「これでいいのだ」

もう一度俺は空気の塊を放つ。

そして、町が砂煙に包まれた。

俺は空の上からそれを見下ろしていた。

何も思わずに。罪悪感さえない。

罪悪感。こんな言葉が出てくるなんて。やはり後ろめたい気持ちがある。

「悪い事したっていう自覚があるのか？あれだけ社会にのけ者にされたのにか？」

俺は自嘲する。

そして過去の記憶がよみがえる。

他人に拒絶される記憶。誰も見てくれない。何一つしてくれない他人。唯一信じた人間にさえ裏切られたこと。

俺の中で何かが千切れた音がしたような気がした。

俺はまた、町を壊した。

第四話

俺は町を壊し、人を傷つけた。

そして俺は追われている。

誰につて？

そりゃあきまつてるでしょ。

日本の平和を守るため日夜頑張るおまわりさん。

空に浮かんでいたわけだが、かなり目立った。

そしてヘリで追い回され、路地に………というわけである。

しかし目の前は行き止まり。

警察がメガホン片手に叫ぶ。

「君は完全に包囲されている。おとなしくでてください！」

ありきたりなセリフだ。

まあ、こいつらもこんな状況は初めてなのだろう。

そんな言葉しか浮かばない気持ちは分かるがな。

「何かここから逃げるために使えるもの！」

てててててて！

「フラフープ……か？」

フラフープが何をするための物かは知っている。

俺はフラフープを始めた。45の体に鞭を打ち、必死に腰を回す。

「……はっ。……き、君は完全に包囲されている……」

あー、はずかしー！！！！

「何も起きねえじゃねえか！」

俺の様子が変だと感じたのか。警察が動き出した。

「やばい！」

慌てた俺は足がもつれ壁に倒れかかった。筈だった。

俺は建物の中にいた。壁にはフラフープに沿って開いた穴が。

警察が迫ってくるが見えて俺はフラフープを外した。穴は跡形も

なく消えた。

少し落ち着いたので辺りを見まわしてみる。

きたねえ家だ。

ふと俺は柱の影からこちらを見つめる少女に気がついた。

着ている服はかなり汚い。

なんだろう。こいつ見たことある。……あれだ。ガキ大将にそっくりだ。

かわいそうに……。

俺は哀れみの目でベレー帽をかぶった少女を見た。

いったいどれくらい見ていたんだろうか。

少女から目を離して表から出ると。

目の前に警察が居た。

たっぷりと。

待とうぜお前ら、はやまるな。うん。

おまわりさん、まじかで見るとこわいよ。

緊張した空気の中、なんだかのんびりしている自分に少しだけは
らがたった。

第五話

先回りされたのか。

俺としたことが……。

まあいいさ、こんなやつら。

さてどんな道具を使って……。

「両手を上にあげなさい」

そんな状況じゃなさそうだな。

「抵抗すれば撃つ」

警官が俺に呼びかける。

警察はみんな拳銃を取り出し、俺に狙いをつけている。

町を壊したんだ。まあそれくらいのは処置がされてても普通だよな。

逆にそうしないほうがおかしいんだよな。

本当に撃つのかな？ふと思った。

ドラマとかでは普通に撃ってるけど、実際の所どうなんだろうか。

威嚇射撃は普通にするとは思っけだな。

実際に俺を撃つことはないだろう。

俺はこっそりポケットに手を入れようと右手を動かした瞬間。

銃声とともに右手を弾丸が貫通する。

っ！？

激痛が体全体に伝わる。

「ぐっ……！」

撃たないんじゃないのか？

そう思った後で俺は気付いた。

俺は町を破壊したんだ。ということは警察もそれだけの兵器を持っていると思っっているということだろう。

もし俺が呼びかけに応じないなら平気で射殺するだろう。

「俺……死ぬのか？拒絶されて最後はこうなるのか？」

その時俺は知った。死ぬことの恐怖を。

頭で死を考えるのは簡単だった。「死ぬ覚悟はできている」そう思ったこともあった。

だけど実際に死が間近に迫っているとこんなにも体は震えるものなのだろうか。

俺が傷つけた何人もの人たちもこんな思いをしたのだろうか。

俺の足元には赤い水溜りが広がっている。

やり直せるならやり直したい。

死にたくない。

「死にたくない」

人を殺したのに？

「死にたくない」

拒絶されているのに？

「俺は死にたくないんだよ！！！」

俺の叫びは警察にも届いていた。

捕まったとしても、どうせ死刑になる。

どうせならいっそ……。

「最後の悪あがきだ。人生最後のな」

俺は左手をすばやくポケットに伸ばす。

銃声が響き渡る中、初めに手に当たったものを引っ張り出す。

これが幸と出るか不幸と出るか。

これが人生最後の出来事かもしれないと思いながら俺は祈った。

第六話

俺がポケットから引っ張り出したもの、それは……。
時計だ。

どこからどう見ても時計だ。

これがどう役に立つかが分からない。

今まで使ってみた道具は数えるほどしかない。

俺は復讐する為……. と思って相手を傷つけるものばかり選んでいたし。

こんな時計の形をした道具は初めてだ。

俺が時計のようなものを見つめていると、

何を勘違いしたのか、警察は再び呼びかけを開始する。

「君、早まっではいけない。君も・・・（ペラペラ）・・・。」

何だ、警察はこれを爆弾かなにかのスイッチだと思っているのか。

これはこの状況を逃さない手は無い。

なんだか分からないものを使うより、

この方法のほうがいいと思ったからだ。

「これ以上近づいてみる。この町が吹き飛ぶぞ。俺が町ひとつくらい破壊できるのは知ってるんだろぅが」

警察がたじろぐ。

このまま進んでいけばこの封鎖網から逃れられるかもしれない。

俺は傷ついた手を時計を持ったもう一方の手で支えた。

手が動かない。

そんなことは逃げてから考えればいいことだが。

俺が歩くたび、警察がじりじりと後退していく。

それはそうだろう。

町ひとつ賭かっているんだから。

しかしなぜだろう、警察は誰一人として慌てていない。

何かまだ秘策があるのだろうか。

シュツ

！？

俺はとつさに一步下がる。

俺から数mはなれた壁が碎ける。

狙撃主か。

何でこんなことになったんだよ。

あの狸め・・・・・・・・。。。

俺はまたあの狸が憎らしくなってきた。

この時計にかけてみるか。

なんて思ってる間に二発目が俺をかすめる

俺が爆弾持つてないっていつ気付いた？

これを使うしかないでしょう。

使い方なんか分からない。時計の針を適当にグルーッと回している。

周りの人間、俺も含めて、すべてが逆方向にうごいていく。

何だこれは？

そんなことを思っている間に弾丸が俺をかすめて狙撃主の元へ戻っていく。

そして俺はフラフープを後ろ向きに通り抜け、

路地を後ろ向きにダッシュし、空に舞い上がる。

頭に小さなプロペラをつけて。

そして俺から徐々にヘリがとおざかり朝が夜になる。

町が砂埃に包まれ町が元通りになっていく。

そして銀行が砂煙とともに復活し、俺は金を置いて銀行を出る。
もちろん後ろ向きで。

時間が戻ったのか？

人が生き返ったのか？

俺はやり直せるのか？

俺は銀行の前に立っていた。

警察に囲まれて。

でも。

まだ俺は強盗をしていないし、町も壊していない。

でも一度、人を殺した。

だけどやり直せる。

所詮俺に殺人は無理だったんだよな。

「よかった。」

そうつぶやく俺を警察は油断無く警戒する。

で、どうすればいい？

第七話

警察は俺を取り囲んでいるが、さっきよりもさらに警戒している。みんな少しのすきも見せまいと拳銃で俺に狙いを付けている。さっきとは桁違いの人数だ。

数十秒の間に人が生き返り町が元通りになったんだ、当たり前だろう。

俺は何でもできると思われているんだから。

ということは警察の記憶も残っているということだろう。

ということは俺が傷つけた人たちの記憶も……。

俺はその人の心に一生消えない傷をつけてしまったのだろう。なんていったって一度死んだ人までいるのだ。

許してくれといっても絶対に無理だろう。

でも。みんなは生きている。

俺も含めてやり直せる。

みんなの記憶を変えることもできるかもしれないけど、

俺はしない。

俺はみんなに償わなければいけない。

俺が傷つけてしまった人たちにこの道具を使いきっても。

「復習とか言ってたくせにな」

俺は手をあげた。

大きく広げて。

警察が少し動揺する。

今まで町を破壊したりしていたやつがいきなり手をあげたことに

驚いたのだろう。

また何かすると思ったのかもしれない。

しばらくして中の一人が俺に近寄ってくる。

俺はおとなしく後ろに手を回す。

ガチャリ、と俺の手に冷たい、自由を奪う枷がかけられた。

45年生きて、初めての出来事だった。

俺はパトカーの中から外を見つめる。

外の景色はいつもどおり。

青い空を白い雲が流れているところまでは。

ビルの谷間を赤い光が走り抜けていく。

ビルの窓に身を乗り出している人達。

捕まるっていう気分がよく分からない。

俺は償いたくて捕まった。

でも、捕まりたくなくて捕まった人の気分はどうなんだろう。

俺と同じ気分なのだろうか。

俺は窓を開ける。

警察が俺の手を強く握る。

逃げたりなんかしないよ。

俺は外の風を受ける。

俺のあまり多くは無い髪の毛を風がなでる。

こんな気分でパトカーに乗るやつなんているのだろうか。

俺はどうなるんだろう。

どうなるにしても、ポケットだけは取っておきたい。

まあ、見つかることは無いだろう。

いきなり刑務所、とかなんてことはないだろうから。

カツ丼とか出るんだろうか？
ふと頭をよぎった思い。

警察署についた俺は何人も警官に囲まれて取調室につれていかれた。

よく見るようなライトは無い。
ついでにカツ丼も無い。

カツ丼、食いたかったな。

第八話

取調べが始まる。

その前に身体検査があつたが、ポケットの中のポケットには気付いてないようだった。

俺は思う。

町を破壊したくらいの俺をたかが警察が取調べをしいいいのか？
普通自衛隊とかさ、政府直属の研究機関がなんたらかんたらじゃないのか？

あれ、壊してないんだったか。

そうだ、もともどったんだった。

目の前にいるのはひげ面の少しがつちりとした感じのおじさん刑事。
事。

もう一人は少しヒョロツとした感じのめがね君。

年は23歳くらい。

めがね君はさっきからちらちらと俺のほうを見ってくる。
怖いのか？

どうやらめがね君はおじさん刑事に

無理やり連れてこられてきたようだった。

「君は……その……町中の人間に幻覚を見せただろ？」
めがね君の質問。

「堂々とはなせよ」

おじさん刑事に小突かれるめがね君。

「は、はい！」

素直だ。

「どうやって幻覚を？」

「超能力です」

「……正直に」

「神からのお告げ？」

自分の方が偉いような気がして調子に乗ってしゃべっている。

町が元に戻ってほつとしているのかもしれないが。

とにかく、こんな会話が続く。

本当のことを言うわけにはいかないのだ。

しかしこんなことを信じるわけではない。

「どんな機械を使ったんだ？何かのガスか？」

「タヌキ」

「本当のことを」

町の人をいくら調べてもそんな後遺症が残っているわけでもなかったため、

俺は一日様子を見た後帰されることとなった。

部屋に入れられ思う。

「……カツ丼……」。

しかしそんなことがあるのだろうか？

いくら証拠が無いとは言え、無罪になるのだろうか？

それとも見張りが付くのだろうか。付くのだろうか。まずは見張りをまいてからかな。

する必要も無いか。

ひとまず泊まりかぁ。

警察署に泊まるのは初めてだ。

当たり前だ。

ひとまず寝るか。

俺は大きくあくびをすると横になった。

第九話

俺は足早に警察署を遠ざかる。

空を飛んだりなんかして追っ手をまく。

警察署を出た俺はなんだか不思議な気分だった。

新しい人生が始まった感じた。

俺はひとまず住んでいたアパートの近くによる。

前と何一つ変わっていない。

公園では子供が遊び、道端でおばさんたちが会話している。

普通の主婦の会話だ。

「あなたもこの街が崩れた幻覚を見たんですか。」

「そうなのよお。」

「誰の仕業かしらねえ。」

広まってる？

俺は電柱の影に身を潜め会話を聞き取る。

しかし、その後その会話になることは無かった。

そして会話は世の中のことへ。

「それより世の中、不景気ねえ。」

「そうよねえ」

「うちの家計も苦しいのなんのって。」

よし。

ひとまずこの人たを助けてあげよう。

ひとまず路地に入る。

ポケットから適当に道具を取りだすと………メガホンだ。

何に使うんだ。

俺はゴミ箱にメガホンを向ける。

「ああ。ごほん。これ意味あるのか？」

反応なし。

「こんな時説明書があつたらなあ。」
反応あり。

ゴミ箱から声が出始める。

「コレハ無生物催眠メガホン。生命体デハナイモノニ催眠術ヲカケル道具デス。」

ああ、そういうこと。

つまりはなんにでもなるってことか。

ちようしにのって隣の壁に向かっていつてみる。

「……君つて言えはいいのか？……君はコンニャクだ。」

触る。

冷たいし、柔らかいし、つやがある。

手を突き刺してちよつとすくう。

食えるのだろうか。

パクッ

うおっ。コンニャク。

コンニャクでこれだけ感動したのは初めてなんだが。

よし、これがあればおばさんたちを助けられるぞ。

再び電柱の影へ。

そうだ。

おばちゃんの持っている日傘、純金にしてみたらどうだろう。

見た目は分からないだろうが、密度とかそういうのを考えれば売れるのではないだろうか。

俺は電柱の陰からそうつと出ておばちゃんにちかづく。

「お前は金だ。」

その時だった。

おばさんの手から傘が離れる。

そしておばちゃんおばちゃんの頭に直撃。

おばちゃんおばちゃんは音も無く崩れ落ちる。

あつ。

どうしよう。

他のおばちゃんおばちゃんたちにめっちゃ見られてるし。

こんなはずじゃなかったのに――。

第十話

きまづいなあ。

俺の目の前には3人のおばちゃんと、気を失っているおばちゃんがいる。

このおばちゃんが倒れたのは俺のせいかな？

おばちゃんの腕の筋力が弱いだけじゃないのか？

おばちゃん3人、おば3はこっちを見る。

おば3は俺をガン見。

「えっと……。お前はローラースケートだ」

自分の靴にメガホンでいう。

おば3はそんな俺を気味が悪そうに見る。

そんな目で見ないで。

「失礼しましたあ！」

俺は道路を駆け抜ける。

45の男が駆け抜ける。

靴はしっかりとローラースケートになっているようで俺は順調にすべ……。つたと思いきや2、3秒でこけた。

こんな平らな道路でこけた人を見ておば3はどう思ったのだろう。

「ふっ、問題ない」

ふっ。こんなこともあるのかと、用意しておいたのだ！

かたづけラッカー、とかかれたスプレーのようなものだ。

自分の体に吹き付ける。

何と体が透明になった。

これは既に検証済み。

確か4時間ほど持続したはずだ。

おば3が悲鳴を上げた。

声を聞きつけた人たちがぞろぞろと集まる。

親切そうなおじさんがおば3に駆け寄る。

「どうしました？」

おばさんは俺のいたはずの所を指差して声色高く叫ぶ。

「変なおじさんが傘でこの人を殴った後こけて……消えてしまったんですう！」

えっ。

殴ってないぞ。

消えたのは事実だが。

おじさんが気絶したおばさんの傘を持とうとすると……。

「重い……………」

それはそうだ。

純金製なんだから。

その後、警察は来るわ、野次馬が集まるわで大変だった。

その間に俺は何十回もけられた。

見えないから。

警察がおば3に写真を見せている。

「この男ですか？それじゃあこの男ですか？」

何枚目かいったときおば3が声を上げた。

「こいつですう！」

その写真は……………俺だ。

なんでやねん！

捕まっでないんだから写真見せる必要ないでしょ！

「やはりこの男か。」

おーい警察のおっちゃん！

何納得しちゃってんの。

確かに俺のせいだけれども。

仕方なく俺は路地に隠れようとしたが、その間に何十回もけられた。

第十一話

あれから4時間。

傘を純金に変えたおばちゃんのを

俺はつけてきたわけだ。

なぜって謝るため。

おばちゃんは家について中に入っている。

しかしすぐに家の中に入ると、

絶対怪しまれるから今俺はこうして待機しているわけだ。

おばちゃんの家は至って普通の住宅街にあった。

家の作りも普通だが、他の家と比べると少し細い。

俺はおばちゃんの家から50メートルほど離れた

路地に隠れて様子を伺っているが……。

さつきスプレーの効果がなくなって姿が見えるようになったのだが、

現れるところをちょうど近所の子供に目撃されてしまったのだ。

うまくいけば親に話して、へえすごいわねえとかで終わるだろう

けど、へたしたらまた警察が来る。

あの子が誰にも言いませんように……。

気付くと時間は1時間も経っていた。

これくらいなら怪しまれないだろ。

俺は思い切っておばちゃんの家近づく。

俺はチャイムを鳴らす。

ピンポン。

「はい。」

この声はあのおばちゃんだ。

カチャッ。

あけた瞬間おばちゃんの顔が青ざめドアをボタンと閉める。

そして耳を澄ますと中であわただしく動く音が。

どうやら鍵がかかっているらしいが、このままでは警察に……

……

俺はポケットからフラフラプ状のものを取り出す。

新たに作った辞書によれば、「通り抜けフープ」だそうだ。

扉に設置。

中へ入ると、おばちゃんの悲鳴。

俺は通り抜けフープをはずしたが、

扉越しに家の前に近所の人が集まっているのが分かった。

「あのお。すいません。」

声をかけるとしばらくして返事が。

「うちに金目のものはありません！」

いやそうじゃないんだけどなあ。

「そうではなくて、今日のことをお詫びに来たんですが……」

……

俺はここに来た目的を伝える。

「やっぱりあんただったのね！」

ええっ!?

10分後、おばちゃんの家は警察に取り囲まれた。

第十二話

何でこんなことになったんでしょう。

さつきからおばちゃんに必死に説明しているのにぜんぜん聞いてくれないし。

おばちゃん、警察が到着してから態度でかくなってきたし。

こういう人嫌い。

ドンドン。

扉が音を立てている。

「。。。さん。どうしました？無事ですか？」

「うちの中に変な人がたてこもっているんですう！」

その言葉を聴いた瞬間、警察は扉をたたくのをやめた。

違うのに。

ひとまずどうしよう。

ポケットから無生物催眠メガホンを取り出し、近くのを辞書にする。

そしてポケットから道具をいろいろ取り出す。

まず出てきたのは、家の形をした積み木の様なもの。

早速いすがしゃべる。

「四次元建増シブロック。1階部分ト2階部分ノ間ニハサメバ家ヲ何階建テニモデキマス。」

そうすると2階に行く必要があるな。

一方おばちゃんは自分のうちのいすが喋ったことに驚いている。

「ひとまず2階に行かせてもらいますから。」

俺はそついうと階段に向かおうとする。

そんな俺をおばさんが必死に止める。

おばちゃんによると片付けてないからだとか。

何が見られたくないものがあるらしい。

それよりも自分のことを心配しろよ！

俺は無視して階段をのぼる。

その俺の横をおばちゃんが全速力で通り抜けていく。

どんなおばちゃんだよ。

俺は2階の書斎？のような部屋に入るとさっきのブロックを取り出す。

そして2階部分はずとその部分に一個ブロックをはさむ。

その瞬間家が揺れた気がした。

窓からそつとのぞくと少し高くなったような気がする。

ちようしにのって5個追加。

また揺れた。

そしておばちゃんの悲鳴が聞こえた。

15個くらいつんだあと、俺は飽きてきた。

窓から眺める景色はビル並みだが、外から見ると変わっていない様だ。

ただいま22階ということだが。

俺は近くのペンにメガホンを使って辞書にし、ポケットの中を探る。

ブロックは積んだままポケットにしまった。

3、4個道具を出す。

布状の道具、まるで手榴弾のようなもの、くじ引きの機械のようなもの、少し変な形をした道具。

「ヒラリマント。アラユルモノ、衝撃ヲ受ケ流スコトガデキマス。」

「コケオドシ手投げ弾。音ト光デ相手ヲ傷ツケルコトナク気絶サセルコトガデキマス。」

「ホームメイロ。コレヲ回スト家ノ構造ガ変ワリ、迷路ニナリマス。」

「アスレチックハウス。コレヲトメナイトアスレチックヲシナケレ
バナラナクナル道具デス。」

おっ。

後半二つを組み合わせるとすごいことになるぞ。

俺はこけおどし何たらを5個ほど普通のポケットにしまっ。

そして辞書から詳しい説明を受け、アスレチック何たらとともに
屋根裏に隠れる。

その場でホーム何たらを15回回す。

また家が揺れているが、そんなことにはかまわずアスレチック何
たらを作動させた。

俺のいる場所の構造が変わるが、俺はプロペラで空中に浮いてい
る。

そしてアスレチック何たらをその場において、

ホーム何たらをポケットにしまい、入れ違いに壁紙を取り出す。

近くの壁に貼り、中に入る。

さて……。

第十二話（前書き）

今回は警察視点で。

第十三話

俺の名前は木暮勇樹。

今年からこの町の駐在所で働くことになった新米刑事だ。

入って早々こんな事件、立てこもり事件に関われるなんてなんて
幸せ者だろう。

俺はその時駐在所で近所のガキの相手をしていた。

駐在さーんおとし物でーすって言いながらはしゃぐガキを相手に
ガキどもはきつと良いことをしたとか思ってるんだろうな。

そんなことは無い。

俺にとってはめんどくさいの一言だ。

しかし、この事件で手柄を立てればそんなめんどくさい仕事はし
なくて良い！

しかし俺が現場に駆けつけて、10分ほど経った時、

この家に住んでいると思われるおばちゃんが2階のベランダから
顔を出した。

犯人の姿は無い。

おばちゃんは俺たちに向かって何か書いた紙を見せる。

【ここから出してください。犯人は書斎にいます。書斎には音は届
きません】

何だ、事件解決か、と思った矢先、

「ひゃあああああつああつああつあああ！！」

なんと耳障りな悲鳴か。

「どうしました？」

ベランダの真下にいた警官が呼びかける。

しかしその声は届いていないようだ。

「いまはしごでいきますから！」

それやるのは別に警官じゃなくていいんじゃないか？

一人がはしごを立て掛け上って行くが・・・・・・・・・・。

たどり着かない。

しばらく経っただろうか、その警官はふと下を見た・・・・・・・・。

・・。

「うわあああああつあああああつああ！」

なんと耳障りな悲鳴か。

その警官は恐る恐る一步一步確実に降りてくる。

降り立ったのはかなり経ってからだったが。

どうしたんだ？

その後、何人もの警官が上ろうとしたが、なぜかたどり着けない。
仕方なく玄関から行くことになった。

おばちゃんがまだあの紙を見せていることから、犯人は2階にいるようだ。

まず1組目がいくことになったが、俺は自分から志願した。
やった。

これで手柄を立てれば。

俺は扉をそうつとあけ、中に踏み込んだ。

第十四話

俺とメガネをかけたひ弱そうな刑事が扉を開けると、そこは台所だった。

メガネが無言で扉を閉める。

「バカ！閉めるなよ。」

俺が扉をもう一度開けると、そこは廊下だった。
えっ？

ちよつと待てよ！

おかしいだろ！

俺たちは廊下に出る。

この家は、いろんな箇所階段があるな。

扉も必要以上にあるきがする。

俺が廊下の真ん中にきたときだった。

廊下が動き出した。

こちら側に向かつて。

このままじゃさっきの台所に逆戻りだ。

「おいめがね！走れ！」

俺はメガネにそう呼びかけると走り出した。

走り出してから5分。
ぜんぜん進んでないし。

スピード上がってないか？

めがねは見た目で分かるように体力が無いらしい。
ちっ。

俺は適当な扉を開けるとめがねの服をつかむと一緒に飛び込んだ

あれ？

ここの床も動いている気がする……ってさっきの廊下じやねえか！

なぜここがさっきと同じ廊下だと分かるか、それはさっきメガネがパニックで拳銃をぶっ放した時の銃痕が壁に残っていたからだ。

ちよつとまてよ！

俺は出てきたところとは違う扉を開け再び飛び込む。

おっ。

廊下じゃねえ！

俺は廊下にまだいるめがねの手を握り中に引き込む。

めがねは思ったよりも飛び、床に激突……。しなかった。
跳ねた。

そういえば足元が変な感じがする。

この部屋は見る限りでは、クローゼットだ。

しかし、足元……。。

トランポリン！？

俺はとにかく跳ねた。

扉にも近づくことができない。

俺はふと天井を見た。

見ると鉄の棒が、鉄棒のようなものがさらに上にある。

「めがね！ あれにつかまれ！」

俺は全体重をこめると跳ねる。

何度か飛ぶうちに、鉄棒に近くなっていく。

めがねはというと……。。

話にならない。

俺はしっかりと鉄棒につかまる。

しかたねえな。

俺は片手でぶら下がり、めがねの手をつかんで引き上げる。

何回目だよ……。

その時だった。

ぶら下がっている俺たちの前にモニターが現れる。

何かが表示される。

逆上がり！？

俺はできそうだが、このめがねは無理じゃないか？

て言うかやらないといけないのか？

第十五話

俺は腕に力を込める。

そして前後に体を振ると、勢いに任せて逆上がりをする。

きまつた！

なぜか俺は得意げな表情に。

すると足元に変化が。

俺の足元がせりあがってきて足場になる。

俺がそこに降りると、1メートルほど先に同じような柱上の足場が現れる。

俺はそこにジャンプする、危なく落ちそうになったが、するとまた先に柱上の……。

俺がそうやって順調に進んで行っているのに対して、めがねはぶら下がったままだ。

「悪いがおいていく。」

俺はそういい残すと再びジャンプした。

「まってよ。ひどいじゃないか！信じてたのに！」

目の前に谷のような裂け目が現れた。

目の前にはロープ。

これをつたっていけてことね。

あつ。

そういえば無線機持ってたんだ。

何で気がつかなかったんだ。

無線機を手取る。

「こちらは木暮。家の中がすごいことになっている。至急応援を頼

む。どうぞ。」

するとザザッと音がして向こうからの返事。

「その家で何が起こっているんだ？報告では、巨大なプールで泳いでいるとか、ハードル競走してるとか………」

「そんなものであるのか。」

「分かりませんがそういうものでいっぱいのです。あと、扉を開けたら同じところに出ました。」

ひとまず報告。

「ひとまず出られるかどうかやってみてくれ。」
「そういうことね。」

俺は無線機をしまうと、ロープをぎゅっと握る。
よし。いくか。

近いと思っていたのに、意外と向こうまで遠い。
真下は真っ暗な穴。

何メートルあるか分からないくらい深い。

ロープをつたい始めて既に15分弱。

俺の腕の筋肉が痙攣を起こしている。

あと数メートル。

頑張らなければ。

俺はようやく向こうにたどり着く。

腕の感覚がない。

しかし。俺は奇妙な信念を貫きとうそつとしていた。

俺は廊下を歩き始める。

さっきの廊下とは違うようだが。

ウーン。

ん？あれ？

廊下の板が立ち上がって・・・・・・・・

廊下がこちらに向かって動いている・・・・・・・・。

ハードル競走？

真後ろはさっきの谷。

ここはなんとしても切り抜けなければ。

俺は全力でハードルを飛び越える。

人間はさまざまな障害を乗り越えてゴールにたどりつく。

しかし本当のゴールなんてないのだ。

ゴールではなく中間地点。

そうやって人間は大きくなるのだ。

b yさまざまな障害を乗り越える男、木暮勇樹

第十六話

前回変なこと言ってますいせん。

それくらい俺の頭は朦朧としていたのだ。

後もう少し先に階段があるのに……………。

すぐそばに扉があるが、どこに繋がっているか分からないため意味がない。

しかし、俺の脚も悲鳴をあげている。

こうなったら一か八かで扉を選ぶか……………。

どうしよう。

そう思っているうちにも俺はまた一つハードルを飛び越える。

あと2メートル。

もうちよつと頑張ってみよう。

俺はまたハードルを越える。

「そう、人生というハードルを」

自分の言葉に酔いしれている。かなり危ない人のようだ。

一方、外で待機している警官たち。

はじめの一組が入って、二組目が入った瞬間、悲鳴が聞こえた。
犯人か？

皆そう思った。

すぐに無線に連絡が入る。

「ザザッ……………俺……………ガボッ……………泳げないんですつ……………」

「泳げないってなにがだ。どうぞ。」

「でっかいプールがっ・・・・・・・・」

「プール？そんなふうには見えないが・・・・・・・・。」
プツン。

何だこれは？

プール？

何だよ驚かせやがって。

ていうか、何で入ったすぐにプールなんだよ。

また連絡が。

また同じようなやつだよ。

今回の犯人はいったいなにがしたんだ？

立てこもっているのはいいが、目的がないじゃないか。

わけわからんぞ犯人。

第十七話

俺は今15階にいると思う。

ハードルを飛び越え、階段を上ってきた訳だが、階段も動くのだ！
しかし、そんな状況で15階までこれるのか？

実は俺はいい方法を見つけてしまったのだ。

さっきハードルを飛び越えていた時、こけて後ろ向き、
つまりあの谷に向かうような形になったわけだ。

そして、俺が後ろを向くと、廊下の動きも逆になり、俺は楽に階段にたどり着けたのだ。

どうやら向かう方向と逆に動くようだ。

階段も同じ。

まるでマイケルのように、俺は後ろ向きで上ってきた。

ま、足を動かさなくても階段が勝手に動いてくれるんだけど。

天才じゃね？

そして俺が今いるのは最上階。

これ以上上に階段がないからだ。

その廊下もムーンウォークで進んでいく。

ふっ。なんか叫びたくなるな。

俺は適当に扉を開ける。

えっ？プールだ。

あぶねえあぶねえ。

閉めてあける。

居間？

閉める、開ける。

トイレ。

閉めて・・・・・・・・。。。

おっ。

今度は書斎のようだ。

足元が縄でできているのが気になるが。

というか網だな。

まあいいさ。

この部屋のどこかに犯人がいる。

いいか。まってるよ犯人！

俺様が捕まえてやつからな！

俺は縄の上を跳び回り、隙間という隙間を調べた。

ちっ。上か。

まだ屋根裏が残っている。

俺はいかにも上ってください、

というようにぶら下がっているロープをつかむと上り始めた。

あと数メートル。

この家に入ってからこんなことを何度思っただろうか。
しかし本当にあと数メートルなのだ！

行くつぺよ！

あと2メートル。

あと・・・・・・・・・・1メートル。

あとちよい・・・・・・・・。。。

「ヨッシャー」

なぜか奇声を上げた俺は目の前に奇妙な機械があることに気付いた。

上にはスイッチが。

「これを、押すのかな？」

誰もいないなか、俺はそうつぶやくと、スイッチを押した。

家が揺れる感じがして、足元が普通に帰った。

よかった。俺は心のそこからそう思った。

あれ？

なんか横にポスター貼ってあるぞ？

第十七話（後書き）

次回、おじさんと木暮さんが！？

第十八話

俺はポスターに手を伸ばす。

なぜそうするのかは分からないが俺は手を伸ばした。

なぜかポスターが開き、俺は吸い込まれるように中へ入った。入った瞬間俺は立ちすくんだ。

中に居たのはどこにでもいるような中年男。

しかし、奴は絶対に人間じゃない。

なぜかそう思った。

俺の第六感がささやく。

今すぐ逃げろ。

なぜだ？なぜ俺はこいつを恐れているんだ？

「よく来れたなあ。」

あいつが喋った。

その言葉はあざけりでもバカにしているわけでもなく、感心していた。

何なんだこいつ？

俺は拳銃を構える。

「手をあげてこっちへ来い。ゆっくりだぞ。」

俺はひとまずそういう。別に意味はない。

だがもしかしたらこうした事で俺が死ぬかもしれないのに。

しかし奴は以外にも俺の言葉に従った。

「別に捕まってもいいけどさ、お前、何のために警官やってんだ？」

えっ？普通犯人にそんなこといわれるか？

「俺は……犯人を捕まえてこの町を平和に……」

「そんなこといつてるけどさ。俺が始めに来た時おばあちゃんがお前の駐在所訪ねてたけど、お前、しっかり取り合ってたってなかっただろ？」

「何で俺の駐在所知ってんだよ!？」

「まあいろいろとな。」

「何だこいつ……。」

「だからなんだってんだよ!？」

「別にお前が仕事ちゃんとやってなかった、なんては言わないけど。一つ言わせてもらっていいか？」

俺は無言のままだ。

別に聞きたいとも思わないけど、聞きたくないとも思えない。

「お前絶対に、将来死ぬほど悩むぞ。こういうのを後悔って言っんだろうけど。多分お前のは、償いのできないことだと思う。」

「何が言いてえんだよ!？」

「恐れるな 未来は変えられる」
「はっ？」

「なに言っただこいつ!？しかもなんか酔いしれてるし。気持ち悪っ！」

「わからないか。ごめんな、俺はここでドロンすることにするよ。」
「そこまで言っといういきなりなんだよ。」

俺は拳銃を再び構える。

引き金を引くべきだろうか？

第十九話（前書き）

今日はおじさん視点で。

第十九話

警官は俺を狙ったまま動かない。

ひとまずドラマであるようなこといつてみたけど、カッコつけすぎたかな？

でもどうしよう。

すぐ使えるように何たらマントはあるけど。

そつえば俺が調子に乗って話してる時のこいつの反応が気になる。

本当は警察っていう仕事が……。

「お前今の仕事に満足してないのなら……、俺と一緒に来るか？」

「！？」

あいつの手にさらに力がこもる。

何だ、気にさわったこといったか？

「手をあげて、こつちへ来い」

さつきと打って変わって、押し殺したような声だ。

「悪いけど、お前に俺は殺せない。それに俺はこの街からいなくなる事にしたから」

「何言ってるんだ！？お前自分が何したか分かってるのか？」

「分かってるさ。怪我させちゃったからな、謝りに来たんだ」

やつの顔に少し変化があった。

普通の奴ならこの言葉も疑ったはずだが、やつは信じてくれたようだ。

あいつが口を開いた。

「付いて行って良いのか？」

「現職の警官がそんなこといつて良いのか？」

あいつの言葉に対し、俺はちゃかしてみる。

「ああ。もう良いんだ」

「今の警官ってそんなふうでいいのか？」

「あんたが誘ったんだろ？」

俺は手を差し出す。

「俺を裏切らないと誓えるか？」

「さあな」

奴はそういつて俺の手を握った。

「たぶんな」

第二十話

3日後。

俺と警官は軽トラに乗り、山道を走っている。

警官の名前は木暮。

俺は免許を持っていないため、木暮が運転している。

山を夕日が照らし、あたりも暗くなってきた。

俺は窓を開け、風に当たる。

柔らかな風が、俺の気持ちをやわらげてくれる。

けっきょくあの町の皆に償えなかったな。

「またなんか考えてるな、凶悪犯さん。」

「お前いい加減その呼びかた止める。」

「そう入っても、あんた、家の構造もとに戻してないだろ？」

あつ。そうだった。

しかたないさ。

今からどこの町に行こうか。

俺はそこで何をしようか。

まだまだ先は長い。

太陽は最後にもう一度あたりをまぶしく照らし、消えた。

いっぽうタヌキさんは

「なんでだよ！何で未来に帰っちゃうのさ！」

「仕方ないのさ。僕は彼の運命を変える手助けをしてしまったからね。当然の報いさ」

「ドラえもんが何を言ってるのか分からないよ！」

「好きってことさ」

「カラ……ドラえもん……」

「どうやらお迎えが来たみたいだね。僕は逝くよ」

「逝くのイントネーションがおいしいよ！ドラえもん！行かないで！僕一人でどうしろっていうのさ！」

「僕にとって生と死は等価値なのさ」

ドラえもんは引き出しから出てきた数人の男たちにつれられて行った。

ドラえもんの最後の言葉。

ただひとつ、「がんばってね」と。

のび太は声も出せずただ見ていた。

何でこんな事になったんだろう。

のび太は拳をぎゅっと握りしめ机を見つめた。

ドラえもんを連れ去った奴らが消えた場所を。

そこに弱虫の面影はなかった。

いっぽうタヌキさんは（後書き）

パクったんじゃない！影響を受けたんだ！
byギリジン

第二十一話

22世紀。

まさに前世紀の人間が夢見た世界。

雲まで届くビル群の中でも、ひとときわ高い建物。

時空管理局とでも言うのだろうか。

その最上階の真っ白な部屋。

無機質な作りの部屋に虚像の人物たちが現れる。人数は5人。いずれも真っ白なつなぎ目のない服を着ている。ノイズが入っているのか、時折人物が揺らめく。

一人が口を開く。片眼鏡をかけた親父。どうやら昔のファッションが好きなようだ。

「奴らを放っておいていいのか？」

「今のところは問題はない」

「しかし、すでに未遂ではあるが町を一つ破壊したんだぞう」

「奴らが許されるのなら、あの猫型ロボットも廃棄にせずとも良かったはずだ」

「……分かった。処分は任せる」

「ありがとうございます」

最後の言葉とともに虚像が消えていく。

残ったのは最後の言葉を口にした人物。この未来世界にもかかわらず眼鏡をかけている。たった今集まった人物の中では一番若いようだ、その落ち着き様から実年齢より上に見える。

「もうすぐだよ。ドラえもん。君を追いやった奴らへの復讐の時だ。そして、君たちの出番さ」

のび太の目の先にはかつての友人がモデルのロボットがあった。

第二十二話

とある国のカフェテラス。

「おっさん、鼻の下がのびてるぞ」

「あ？」

「何道行く女性全員に鼻の下のばしてんだよ。て言うかおばさんとかも居るぞ」

「俺の年齢から言うとな。50歳程度までならストライクゾーンなんだよ」

「変態ロリコンおやじめ」

「ところで、次はこの国へ行く？」

「イタリアは行ったばかりだし……ドイツは？」

「まあなんたらコンニャクがあれば大丈夫だろうが」

「そうと決まったら行こうぜ。ほら、ドア出せ、ドア」

木暮に言われた俺はポケットに手をつ込みドアを引っ張り出した。

「いきますか。いぞ、ドイツへ！」

もちろんこのカフェで飲食した分は踏み倒す。

「先行くぞ、おっさん」

木暮はドアに消えた。

俺も続きドアをしまう。

「……ドイツって名産なんだっけ？」

「フランクフルトじゃないか？」

俺の言葉に反応する木暮。

「ドイツの有名なものって何だっけ？」

「べ、ベルリンの壁？」

木暮の言葉に俺は反応する。

「ドイツのこと全然しらねえや」

俺たちは肩を落とすと近くの銅像の縁に腰掛けた。

気が抜けたような木暮だったが何かを見つけたのか目が輝き始める。

「かわいいこがいるな」

「どこどこ？」

「おっさんのくせにがつつくんじゃねえよ」

「あれだ」

「本当だ。すんげーかわいい」

俺たちは他愛もない会話をする。

それくらいしかすることがない。

「……なあ。そろそろ日本に戻っても大丈夫じゃねーか？」

「まあ、直接人を殺したとかはないからな。もう1年だもんな」

「じゃあ、もどれるか？」

「っていうか。日本の法律に詳しいのは警察官のお前だろ？」

「俺は法律にとらわれない存在だ」

「警察の話をしてると、みろ、ドイツの警察だ」

「本当だ。日本とは違うんだな」

「こっち指さしてんぞ」

「本当だ。こっちにくるな」

「ああ。逃げた方が良いかな」

「後で落ち合おう。スペアは持つてるし。ニューヨークで落ち合おう！」

「う！」

「なんでニューヨークなんだ？」

木暮は消えた。

仕方ないな。

俺はドアを取り出し、取り出しざまに潜り込んだ。

銃声が聞こえたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7319k/>

ドラえものの道具を手に入れた男の逆襲

2011年7月26日21時53分発行